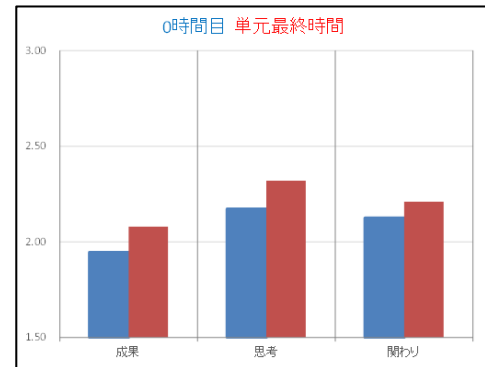
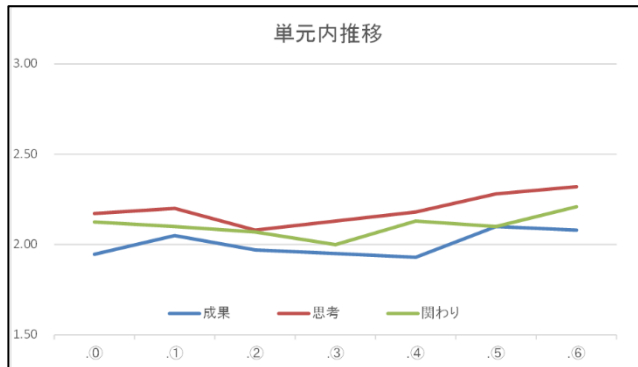


1 単元名 鉄棒運動でめざせ！金メダル！

(器械運動・鉄棒運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子17名 女子15名 計32名



- ・「成果」は単元前よりも高い結果となった。逆上がりができない児童が約半数いたが、人数が多かったことで、補助や声掛け等で多くの関わりが生まれ、励まし合ったり喜びを分かち合ったりしながら大半の児童ができるようになっていた。また、後方支持回転や前方支持回転などの技については、めあては全体で統一しても、取り組む技や課題解決の方法は一人一人に合ったものを選ぶように、児童の実態をしっかりと把握したことが評価に繋がったのではないかと考える。
- ・「思考」も単元前よりも向上が見られる。特に、課題解決の取組の時間を多く取った単元後半に進むに連れて数値が上がっている。学習カードを見ると、課題に向かって技や場、用具など、自分に合ったものを適切に選ぶことができていた結果だということがわかった。
- ・「関わり」についても、全体的に向上していることがわかる。特に3時間目から後半にかけての伸びが大きい。グループでの関わり方や、友達と関わることのよさを全体で共有しながら進めていたことが、数値が高くなった要因だと考えられる。

(2) 技能面

	①逆上がり			②一の字逆上がり		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	18	0	14	4	7	21
単元後	24	4	4	10	7	15
	③前回り			④後方支持回転		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	13	16	3	4	7	21
単元後	19	10	3	10	8	14
	⑤前方支持回転			⑥後方支持回転と前方支持回転の組み合わせ技 (同じ技を連続して行うことも可)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	4	2	26	4	2	26
単元後	9	3	20	6	10	16

- ・どの技でも、単元前と比較するとできるようになった児童が増えたことがわかる。基礎基本となる動きを、毎時間の体ならしの運動で積み重ねたことが技の獲得に繋がった要因であると考えられる。
- ・今回単元のゴールとした組み合わせ技については、約半数の児童ができないまま単元を終えることになった。単元ははじめに一つ一つの技の習得率が低かったため、基本に返ってそれぞれの技の練習が中心となってしまった。本来であれば技のつなぎや組み合わせ方に重点を置きたいところであり、基礎を固める低・中学年での取組や、他学年との縦の繋がりの大切さを強く感じた。

(3) 思考面

問 後方支持回転と前方支持回転ができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか（しましたか）。（複数可）		
単元前	単元後	
<後方支持回転> ・逆上がりの練習 10 ・腕を曲げる 6 ・鉄棒にお腹を付ける 5 ・膝を曲げる 4 ・腕の力をつける 4 ・足の付け根とお腹で鉄棒を挟む 2 ・大きく足を振る 2 ・足を巻き込む 2 <前方支持回転> ・前回りの練習 8 ・ダンゴムシなどの体が鉄棒から離れない練習 4 ・手首を回転させる 3 ・鉄棒にお腹をつける 3 ・手首を捻る 1 ・体が鉄棒から離れないようにする 1 ・最後に鉄棒を強く押す 1 ・体を丸める 1	<後方支持回転> ・つばめの姿勢から勢いよく足を振った 9 ・補助ベルトを使って鉄棒と離れないようにした 8 ・連続逆上がりをした 6 ・足の部分を補助してもらった 5 ・足の付け根とお腹で鉄棒を挟んだ 5 ・振り上げた足は後ろ（頭）の方へ持って行った 3 ・大きく足を振った 2 ・腕の力をつけた 2 <前方支持回転> ・補助ベルトを使って鉄棒と離れないようにした 8 ・できるだけ頭を遠くにして回った 7 ・しゃがんだ状態から鉄棒に飛び乗って手首を返した 5 ・鉄棒に足の付け根をつけた 3 ・あごを引いた 3 ・体が起き上がるときに肘を伸ばして鉄棒を押した 3 ・ダンゴムシなどで体を締める練習をした 2	

- ・取組や練習についての問いでは、体ならしの運動で行った動きや、課題として繰り返し取り組んだポイントに着目することができていた。友達と互いに見合ったり、繰り返し確認したりしたポイントが、しっかり知識として定着したことがうかがえる。
- ・技のポイントを獲得することに直結した具体的な記述が増えた。「〇〇の練習をすれば、△△ができるようになる」といったような、課題解決学習を意識して行ってきたことが、単元後の回答に結び付いたと考えられる。

3 成果と課題

高学年のめざす姿

課題に対しての自分の考えをもったり、仲間と試行錯誤したりするとともに、解決する場や方法を伝え合う児童

【成果】

- ・技の組み合わせ方について、フローチャート表を使ってわかりやすく可視化したことで、自分に合った技を選んで組み合わせることができていた。それを基に、難度の高い技の練習方法や場の工夫、補助など自分に必要なことを選択し、課題解決に向けて友達と関わり合いながら取り組むことができた。
- ・同じ技能段階のグループで活動すると、共通の課題をもつことができるため、補助やアドバイスに困ることなく活発に関わり合う姿が見られた。また、逆上がりを練習していたグループは、低学年の頃から頑張っているのにできないもどかしさを互いに分かち合っ、励まし合う声が多く聞こえてきた。友達のことも自分事として捉え、できたときにはみんなで喜ぶなど、心に寄り添う温かい姿が見られた。学習のねらいに沿ってグループを構成する必要性を強く感じた。

【課題】

- ・体ならしの運動は、単元を通して同じ運動を行った。しっかりと定着させるために繰り返し行ってきたが、単元の後半では「慣れ」が「飽き」に変わり、ポイントへの意識が薄れていったように感じた。繰り返し行うことも大切であるが、違う動きを取り入れたり難度を上げたりするなどの変化をつけることで、単元後半まで意欲を落とさずに楽しく取り組むことができたのではないかと考える。
- ・技はできないが技能ポイントはわかる児童や、技はできるが技能ポイントは言えない児童もいる。両者は、知識と技能が結びついていないため、活動の中で一致させられるように整理し、全児童が「わかって、できる」姿をめざしたい。